事例研究報告

特別支援学校中学部生徒が自発的に挨拶を行うための指導実践

対象生徒の実態

中学部生徒　　（知的障がい，自閉症あり）

Aグループ
- 言葉でのコミュニケーションが可能である。
- 教員からの働きかけがあるとできるが，自発的な挨拶はない。
- 一部の生徒は，働きかけがあっても挨拶をしない生徒がいる。

Bグループ
- 発語は不明瞭で，身振りやクレーンハンド，カードでコミュニケーションをとる。
- 教員からの挨拶があると，言葉や礼，手を振るなどの挨拶ができるが，自発的な挨拶はない。

自発的に挨拶ができるようになってほしい。

～働きかけがないと，どうして挨拶ができないのか～

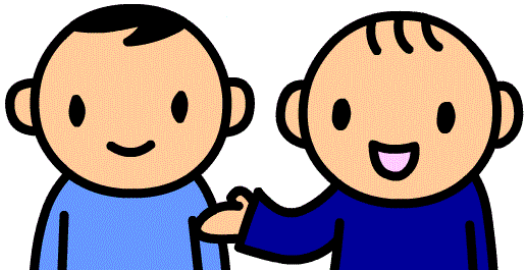
・挨拶をする必要性を知らない。
・自分から挨拶をした経験が少ない。
・今まで自分から挨拶をすることについて教えられていない。

↓

教員の願い

中学部の段階で自発的な挨拶を習得することで，将来の社会生活の基盤となるようなコミュニケーション力となることを期待する。

指導目標



■Aグループ

担任外教員へ自分から「（先生）さようなら」と挨拶をすることができる。

■Bグループ

担任外教員へ自分から，それぞれの方法で挨拶をすることができる。

アドバイザーからの助言（１回目）

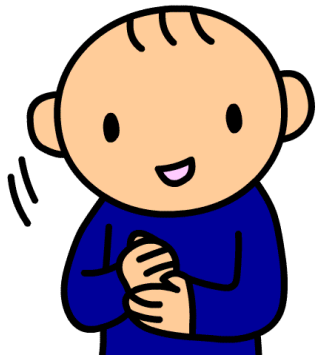
1. 挨拶のメリット・デメリットを伝える。

2. A・Bグループのグラフを統一する。

3. プロンプトを統一する。

4. 登校時の挨拶（おはようございます）を般化場面にする。

助言（１回目）を受けての見直し



１．挨拶のメリット・デメリットを伝える。

→事前学習を設け，全体の授業で伝えた。

２．Ａ・Ｂグループのグラフを統一する。

→結果をグループで分けず，学年全体の結果を１つのグラフで提示した。

３．Ａ・Ｂグループのプロンプトを統一する。

→言葉かけを４段階に設定し，【い】から順番に１回ずつとした。

い「何か，言うことないかな？」

ろ「あいさつは？」

は「さようなら　は？」

に「さようなら」音声と動作あり

記録用紙に「いろはに」を記入した。

４．登校時の挨拶（おはようございます）を般化場面とする。

→９/28～９/30にベースライン，11/15～11/19に般化場面として記録した。

介入の流れ

	介入１	介入２	介入３	介入４
期間	10/4~10/8	10/18~10/22	11/8~11/12	11/15~11/19
対象	５日間同一教員	日替わりで違う教員 （関わりの多い教員）	日替わりで違う教員 （関わりの少ない教員）	日替わりで違う教員 （関わりの少ない教員）
予告	あり	なし	なし	なし
ボール	あり	あり	なし	なし
称賛	あり	あり	あり	あり
場所	スロープ	スロープ	スロープ	エレベーター前

ボール入れ

グラフ

教員に挨拶ができたら，ボール（ご褒美）を教員から受け取る。
ボールを受け取ったら，ボール入れに貯める。
１日ごとのボールの数をグラフにし掲示する。

記録方法と記録

R３コンサル記録用紙

（名前）

目標
①「〇〇先生、(先生)さようなら」と自分からいうことができる
②「さようなら」と自分から言うことができる
③担任と一緒にそれぞれの方法で挨拶ができる
（　　）

・達成したときにもらえるボールの色（Aグループ）
プロンプトなし･･･ピンク色
プロンプトあり･･･緑色
プロンプトをしたが達成できなかった･･･ボールなし

・達成したときにもらえるボールの色（Bグループ）
担任と一緒にそれぞれの方法でできた･･･黄色
できなかった･･･ボールなし

	／	／	／	／	／
教員の前で止まる					
教員の方へ身体を向ける					
教員を見る					
「〇〇先生（先生）」と言う					
「さようなら」と言う					
それぞれの方法でさようならができる					
教員に挨拶が聞こえる					
お辞儀ができる（お辞儀を目標としない生徒のみ）					
教員が「さようなら」と返すまで待っている					

生徒一人に１枚で毎週学級担任に記録をしてもらいました。

プロンプトは「い」から**１回ずつ**行ってください。

できた･･･〇　　できなかった･･･×
プロンプト「ちょっと待って。何か言うことはないかな？」･･･い
「あいさつ（先生）は？」･･･ろ
「さようなら　は？」･･･は
「さようなら」音声と動作(見本)あり･･･に

結果

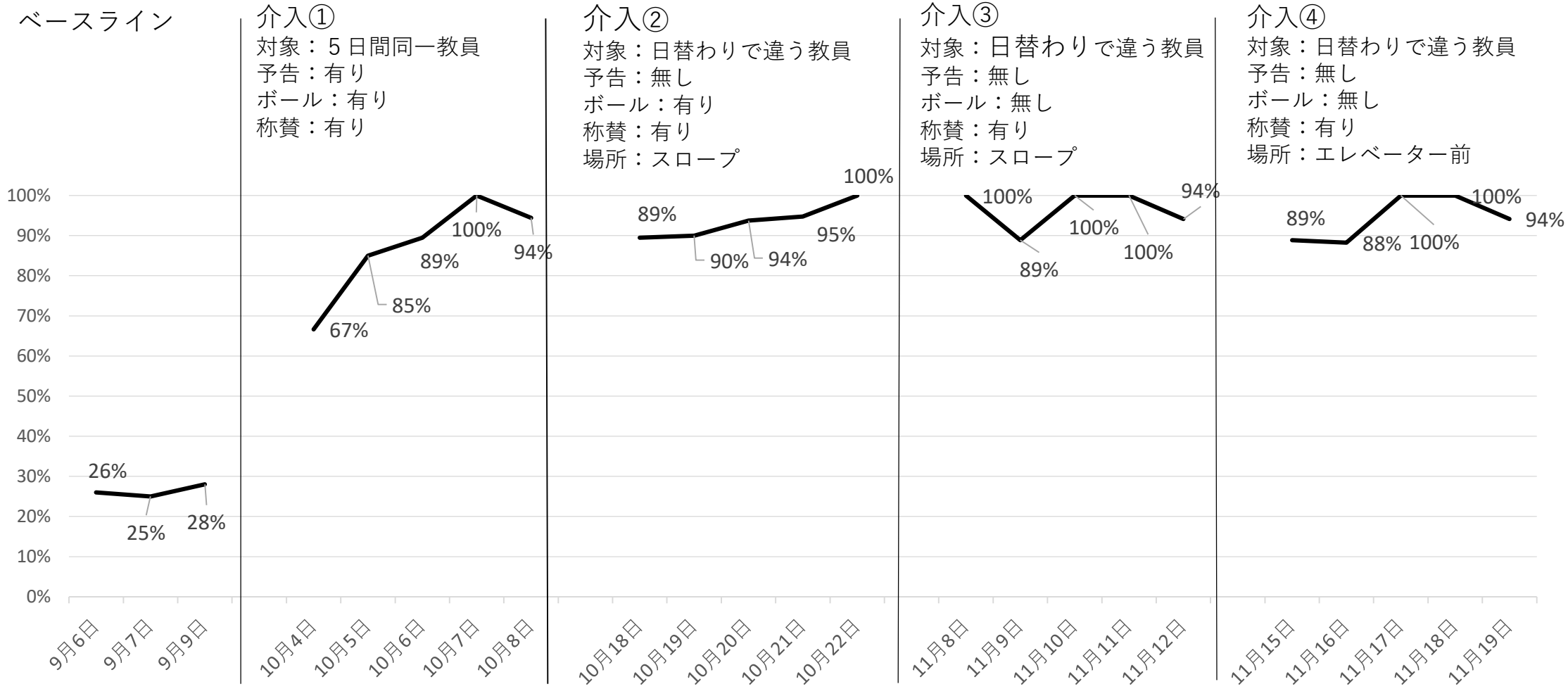


図1　　自発的にあいさつ（さようなら）ができたかどうか（介入場面）

指導の成果

■好子にボールを取り入れることで，生徒の挨拶をする意欲が高まった。

■介入に関わった教員には，下校の挨拶ができるようになってきた。

■場所を変えても，多数の生徒が下校の挨拶をすることができた。

■生徒の挨拶への意識が高まった。

■学年全体で取り組むことで，統一した指導を心がけることができた。

■挨拶は，将来に向けて必要な指導であると再認識した。

般化（登校時）

Ａ：担任外教員へ自分から「（先生 ）おはようございます」
　と挨拶をする。

Ｂ：担任外教員へ自分から，それぞれの方法で挨拶をする。

〈ベースライン〉９月２８日～９月３０日　３日間

〈介入後〉１１月１５日～１１月１９日　５日間

結果

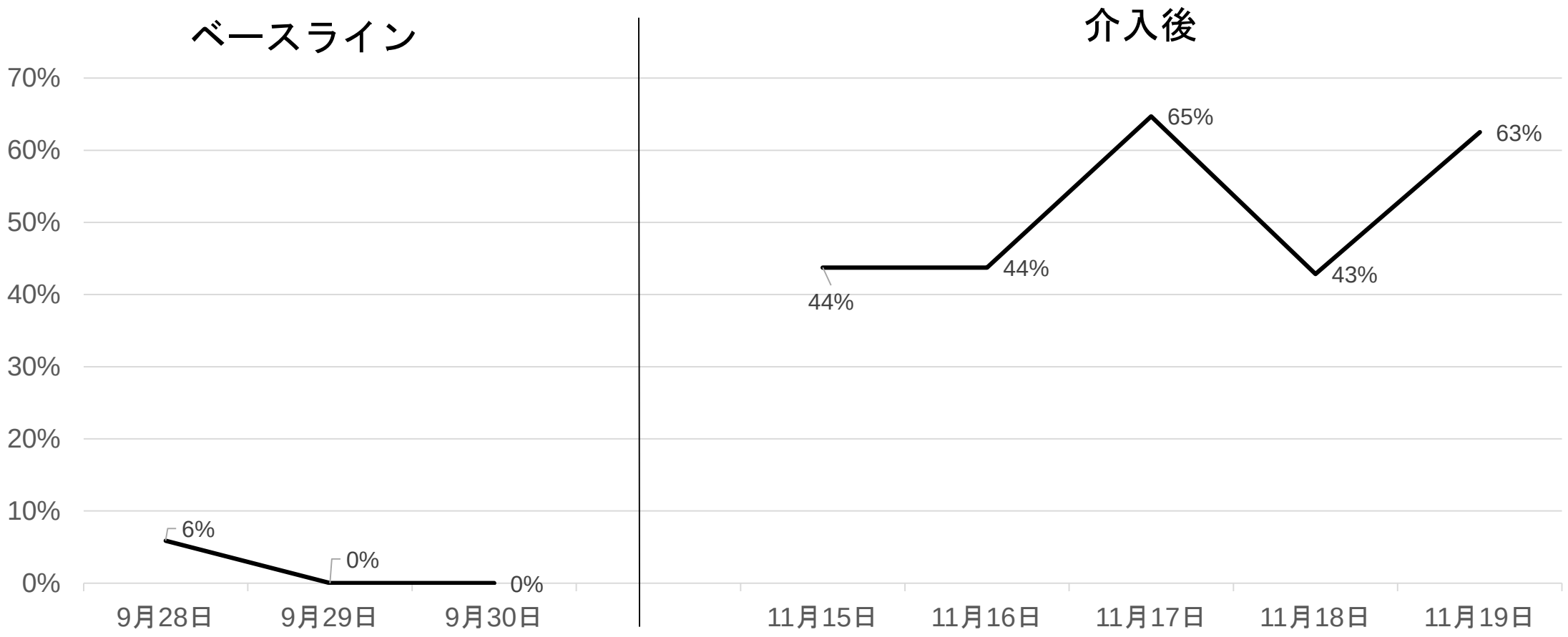


図２　　自発的にあいさつ（おはようございます）ができたかどうか（般化場面）

アドバイザーからの助言（２回目）

1. 全体的に取り組みがうまくいっている。般化場面でもうまくいっているので，引き続き指導を継続した方がよい。
2. A・Bグループは目標が異なるため今後グラフを別にして記録をとる。（プロンプトは統一）
3. 教員の前をあいさつせずに素通りする生徒がいる時は，足形（視覚的支援）を試した方がよい。

助言（２回目）を受けての見直し

1. 全体的に取り組みがうまくいっている。般化場面でもうまくいっているので，引き続き指導を継続した方がよい。

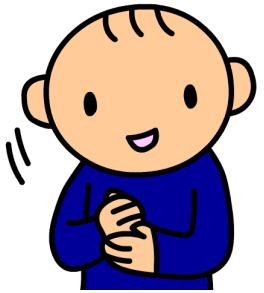
   → 引き続き新しく２つの場面で記録をとる。

2. A・Bグループは目標が異なるため今後グラフを別にして記録をとる。（プロンプトは統一）

   → A・Bグループでそれぞれの場面を設定し，それぞれのグラフで記録をとる。

3. 教員の前をあいさつせずに素通りする生徒がいる時は，足形（視覚的支援）を試した方がよい。

   → Bグループの生徒に多いため，新しい場面で実践する。



取り組みを通して，気付いたこと①

■介入場面以外でも，関わりのある教員には自発的に挨拶ができる生徒が増えてきた。

■学年全体で取り組むことにより，生徒は照れや抵抗感なく挨拶をすることができた。

■他学年や他学部の教員に自発的に挨拶ができている生徒は少ない為，引き続き指導が必要である。

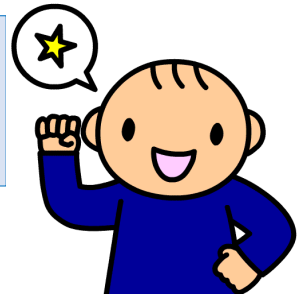
取り組みを通して，気付いたこと②

■般化場面では，介入場面に比べて達成率が低く，言葉や時間帯が変わると難しい生徒が多かった。「先生，おはようございます」とは言えなかったが，「おはようございます」と言えた生徒が８０％を超える日があった。

■プロンプトをなくしていくために，視覚的支援等を用いた指導が必要であると感じた。

■それぞれの生徒が目標を達成する毎に，教員一人一人が将来的な目線を持って，次の目標を考える機会となった。

ここが成功のポイント



■今回の取り組みでは，初めはボールと言語称賛が好子となり受け取ることを楽しみにしている生徒が多かった。取り組んでいくうちに，言語称賛のみになっても一人一人が持続してあいさつすることができるようになった。

■学年全体で取り組んでいたため，クラスの友だちが良いお手本となったため触発されてできるようになった生徒も多かった。

■学年全体で取り組んだことで，担当者間で綿密な話し合いを行い，学年の教員全員が共通の指導方法を共有できたため，指導が一元化できた。